

会 報

No. 1



中部日本地質調査業協会

●●● 目

次 ●●●

卷 頭 言	1	/	✓
躍進第1号として	3		
秋・秋・秋	4		
近代文化と地質調査	5	←	✓
夏季麻雀大会	12		
第15回定期理事会	14		
文 芸 欄	16		
6月分業績表	17		
第16回定期理事会	19		
7月分業績表	22		

— 卷 頭 言 —

小 松 幹 男

本年の5月の中部地質調査業協会へ送出された新理事による第1回の理事会で、37年度の事業計画を協議したときに「協会誌も、もどっとまじな形にして、内容もよくしようじやないか」ということになって、新たに設けられた広告宣伝部の理事が、その面倒をみることになったが、なにしろ担当者がいづれも忙がしい方々ですし、その他原稿のよりも悪い等の事情もあって協会員の方々には誠にもうし訳ないこととありますが、12月にやっと新装の第1冊目が出ることになりました。当事者の1頁として、その不幸際を深く御詫びします。

として、協会といたしましては、今後もこの程度の協会誌を継続して出したいと思っておりますので、協会員の各位におかれましても有意義な原稿をどしどし御提供下さい。

ところで、吾々地質調査業者は、建設工事で、いかなるポジションにあるべきかという疑問を小生は、常々感じておりますので、このことについて、以下に文章として、ならべてみたいと思います。

建設工事のうち、特に土木工事は、その名の示すように、地球の母体である地盤を改修して、道路、鉄道、港湾、河川等を造り、自然のもたらす圧力を征服して、住み易い社会を造る公共事業ですが、自然の圧力といいますと、すぐに風、水等が考えられますが、これらを防ぐ堤防は土で作られていますし、その設ける地盤は、主として低地帯の軟弱地盤であります。その他の圧力としては、峻険な山や谷に道路、鉄道、ダム等を造るときに色々な形で生じます。

このように土木工事は、地盤を形成する地質を切ったり、盛ったりするときに生ずる土や岩の圧力との戦いであり、これを征服しなければ工事の完成は出来ません。

しからば、どのように戦うべきかということになりますが、この戦いには、孫子の兵法や、作戦要務令等は必要ありません、必要なのは地質調査です。そして、いよいよ吾々地質調査業者の登場となります。

すなわち、建設工事の作戦は、合理的な作用を生ずる自然地盤の力を正確に知って建てるのです。現在の土木工事力を以つてすれば、自然地盤の力と正確につかんで設計し、施工をすれば不可能な工事はなく、あの大きな揚子江さえも橋が架けられます。

このように設計および施工の指針となり基礎となる地質調査は、当然重要とされ、金とかけ正確な調査がなされなければならぬ筈です。そして調査結果が工事の成否に影響し、工費を大きく左右することは、自明の理です。

以上のように考えれば、吾々地質調査業者の重要度は、あらたまつて及言することもないでしょう。

近ごろ、建設コンサルタントが認識され活用されていますが、吾々の仕事は本質的にコンサルティングワークであり、その成果が工事全体に及ぼす影響が大きいので、むしろ調査結果をベースとして仕事をする設計コンサルタント以上にその責任は重いのです。

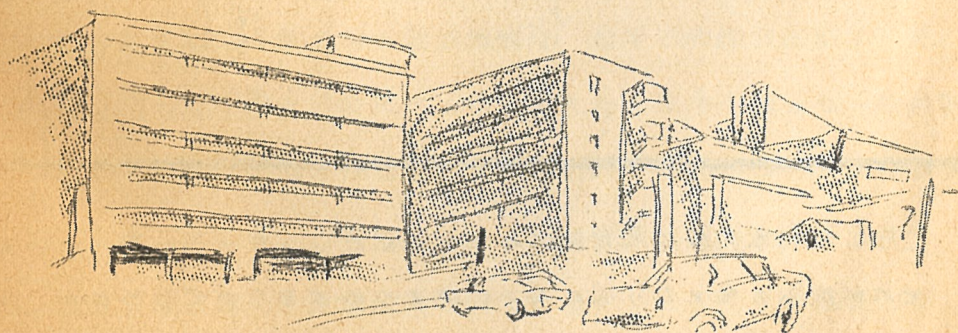
しからば、その責任の重い吾々地質調査業者の技術は如何、そして特長は如何ということになりますが、はなはだ残念であります。そのいづれも吾々のサイフが如実に解答を与えてくれます。10の数年間と同コストの値段は諸物価高騰の折から甚だなつとくのかない現象がありますが、その責任の大半は地質調査業者自身にあるように思いますが、どんなものなのでしょうか。『衣食足つて礼節を知る』

という言葉がありますが、現在の高麗の技術はいづれも驚める国からのものではあります。“王子が先かニワトリが先か”という言葉もありますが、この場合は、金の王子を生むニワトリの養父が先のような気がします。

躍進第一号として

なからく休刊さして頂きましたが、漸く内外共に進展したものをお届けできる段階に到達しました事を皆様と共に祝福致したいと存じます。何分にも素人芸の事とて、今後共お不遇、致らぬ点は、その節度お指示を頂き、よりよく充実させて、皆様と一緒に納得してお受読願える会報と致したいと存じて居ります次第絶大のお声援をお願いします。

なお、休刊当時よりの滞り記事を増載して滞り分を取り返したいのど2、3ヶ月はかかると存じますが、よろしくお願い申し上げます。



秋

秋

秋

同君は 今に 物とる 此の けれ
此身一つの 秋は あらねど
大に 今

心なき身にも 秋は 知られず

しき 主の 涙の 秋の けれ

西行

この 道や 行く 人なす に 秋の けれ

芭蕉

行く 女を しめ かけ けり

法門 子

子 規

こうした日本民族の季節感には必ず旅愁といったものが潜っている
それが民族の血となり肉となつて伝えられてきたのだと思うが、な
ぜわれわれの民族は秋のみをこの様に悲しく淋しいものとみるよう
になったのだろうか。

◆ 近代文化と地質調査 ◆

佐藤 久松

地球に生物が発生してから幾万年であろうか、ダーウィンの進化論によれば、アミーバに始まり人類にまで及んだ長い期間に生物は、その生命保持の為にあらゆる天変地異と闘い神から与えられた本能—食欲と性慾—を発揮して生存への無意識な努力を続けて来た。この境みなき生命の丁度、遂に我等人類の出現を招来したのである。人類は将来果してどんな生物に進化して行くだろうか、或は又我等人類の五感に触れない世界に於いて人類以上の生物が存在しているであろうか。

この空想は暫く置き現在の人類の生活は高山の頂から深海の底、地球の両極にまで及んでいる。又、地球の世界を離れて宇宙にまで飛び出すに至っている。このような人類生活の発展の根柢をなすものはなんであろうか、一言にして云えば、エネルギーの発達とみられる約一世紀前から蒸気の発明後幾許もなく電気が発見されてあらゆる動力源は電気万能となり蒸気機関は、最早古典的文化財かに見えたと思う間もなく原子力の時代がやって来た。生命に対する人類の執着は円満もなほ、このような変化を続けて行くであろう、之が所謂人類の文明生活である。動力の変革は当然産業の形態を変えてきたし産業の変革は人類の生活環境を変貌してゆく、この変化の激流の中に現代

の人類は自からの生命を維持してゆかなければならぬ宿命を負っている、この様な人類の在り方は果して人類の幸福と云うべきであろうか抑のみ之を知り給うのである。唯我等は大いなる力にひかれて、この激流に溺れ去らないことを努めるのみである。

このようなめまぐるしい変革の歴史を模索してゆくエネルギー科学を基調として近代文明は生まれそえた。確かに文明は我等人類の生活を所謂文化生活にしたし。なお一層高度の文化生活を営む事が出来る様にするであろう。

そして我等は、それを享受しなければ逐逐者になるしか途はないようである。好むと好まざるとに拘らない大いなる宿命とでも云える様である。そこで我等は考えてみる、産業の革命は資源の開拓において地になかった事を、当初は必要の物資を得るために幾千里と遠しとせず萬里の波濤を越えて世界の涯に之を求め、或いは深山幽谷に之を探り生命の秘陰を冒してまごも之を得る事を競ったのであったが求めて之を得る限界は限られていた人類の生活が地上に点在する物資のみにより漸く所謂当時の文化生活にまご引きあげられて来た時資源探求の眼は自ら立体的となり地下に埋蔵されている物資に向けられる様になった。すなわち、鉱業の監視である。鉱物資源の存在を求めて地下を探り探鉱の技術が生まれた。地下の資源を探るには、その存在を確認しなければならぬ眼に見えない地下資源を知る為の一つは地質

調査　ボーリングの方法を生み　一つは物理探査の方法を用いた前者は、地中深く埋もれている資源を現実的に地上に引き上げて実際に五穀之れを見ると共に科学的に分析して価値を判断するに役立った又後者は、我等人類の科学的睿智で地下構造の状態を探知せんとする触覚の役割を演じたのであったが、前者の様な正確さは期待し得ないものであったけれども、この両者は鉱山企業の実験者として採鉱技術の有力な一部門として今日に及んでいる。そして今日以後なお我等に知られない地下資源を開発してゆくに役立つであろう。

このようにして発達した地質調査ボーリングの技術が建設事業に利用せられるようになったのは、いつ頃であるか、日本国内に遺る大きな土木建築物の遺跡は、奈良平安時代の仏教建築に始まり江戸城を始め戦国時代の築城等幾多の大建築物が遺されているが、之れ等の事業に地質調査がどんなに利用されたかは寡聞にして判らないが、想像するところ地表踏査により之を計画施工したものと推えられる。又、広く世界に之を見れば、中国の万里の長城、ローマやエジプトの遺跡等歴代の我等の眼から見ればあの当時この様な大規模な土木事業を遂行した勇氣と努力に対して驚きと敬意を禁じ得ないものであるが、事前の調査計画が如何ように進められたかは知る由もない、当時之の葬設にあつた人人は永久に安泰なものであることを確信していたのであろうか。

確信していたからこそ、之を造営したに違いない筈に興味ある問題である。然し、ここに一つの問題がある。と云うのは、之等の確信は聖殿から生れたものではないであろうか、と云う事である筆者はその例証をピザの斜塔にみるのである。あの塔は設計者も施工者も初めから斜に建てる積りはなかったものと思われる。出来ると間もなく——之は文獻に明らかであろうが——アレヨアレヨと云ううちにあの様に傾いてしまったものと考えられる。そして傾きの巧名が今日なお傾いたまゝに安定して却つて著名になった様である。あれで傾斜が止つたからいいようなもののドンドンと傾いて止まらなかつたらどういふ事になったであろうか、その頃の設計者や施工者の胸中が判るような疑がする。その頃の新聞でもあったら誠に面白いであろう、尤も新聞は、まだ発行されてはいなかったが、

余談は、おいて文化の発達に伴ない人類の生活は地上に大規模な建築物を築むようになって構造の様式や材料について考えなければならぬ様になった、すなわち、構造力学と材料学の進歩である。そして建築物の目に見える部分に対する研究の努力は現代の科学的な構造技術を生んだのであるが、肝心な基礎工学については、あまり足許に気がつかないかつたし、又之をなめよくする作業は困難を極めた五里霧中の状態に放かれていたのである。このことは何によるものであるか自分が立っている足許をおろそかにしたと云うのは、どうしたことであろうか、之れは、

興味あることの様である。ノアの洪水やボンベイ最後の日を忘れて地上こそは人類に最も安全な棲息の場所であるという幾万年の生命の歴史から得た人類の本能的な意識は、この様な科学の盲点を植えつけられて終っていたのであろうか。その理由は別として確かに構造物基礎の安定に対する考え方は、あまりにも甘いもののようであつたとしが考えられない。換言すれば、幾多の不可解な要素を包蔵する土の科学は理論の体系が複雑であるばかりでなく、その煩わしさと労力の大なるに比し酬いられる処は余りにも少なかつたようにも思えるのである。この事は土木史上誠に不幸なことであつたと思われるのであるが、この頃までの土木構造物企画の目的の多くは宗教的なものか、或は政治権力闘争上必要なものであつて多数の人類——大衆とでも云おうか——には、その存在はあまり直接の影響はなかつたものゝ様である。云つてみれば大衆の生活には、余り関係がなかつたように思われるのである。塔が傾こうと、城壁が崩れようと大衆は傍観者ぞ痛痒を感ぜなかつたように思われる。せいぜい狩り出されて苦役をさせられた位であらう。

然し、二十世紀にはいつてからの大土木事業計画の使命は、エネルギーの膨大な増進と産業の勃興によつて社会思潮は、絶対多数を占める大衆の生活を本位とすることを余儀なくされ始めた簡単に言えば、文化を均等に分配する為めの生産的建造物になつて来たのである。このにおいて重要建造物の存在は、大衆の生活に

直結して、また之れが傾いたり崩れたりしては、社会の安寧や大衆の生活と脅かすに至る、大衆は生産の増大を要求し、生産の増大には生産設備の堅牢が肝要である、構造物のすべては安泰となければならない。

この厳格な過程において基礎工に対する智識の必要が生まれたのである、

そして、その遅れを挽回しなければならなくなったのが、基礎工学の現状ではないであろうか、ここに至って筆者は、カール、テルザギの言を思い起すのである、

On account of the fact that there is no glory in the foundations, and that the sources of success or failure are hidden deep in the ground, building foundation's have always been treated as step-children, and their act of revenge for lack of attention can be very embarrassing.

これは、1951年ロンドンの建築学会議で行なったテルザギ教

教授の講演の一説である。基礎工学に対する世人の関心を促す警鐘として我等の耳に残る言葉である、エネルギーの革命は、産業の変革を促し続けてゆくであろうし、生産の増大と科学技術の進歩は大構造物の素質をより合理化し、堅牢化する事を益々要求してゆくであろう構造力学の進歩に遅れることなく基礎工学の発達に邁進することは20世紀後半における建設科学技術界に課せられた使命である。

この遅れた基礎工学進展の一翼を担うことは我等地質調査を行なう者にとって洵に重大なる責務であることを臆じないではいられない。

古人の言に 縁の下の方持ち とあるが、我等の仕事は縁の下の方持ちどころではない。土台石の下の方掘りであるまことに地味な、そして人目につかぬ仕事であるが、その使命は重大である。よき地質調査の行なわれる所必らず基礎工学の進歩があり惹いては生産向上への貢献ともなつて人類大衆に幸福を齎らすものと考えられるのである。

世界経済と直結する日本経済界において地質調査業は企業としては、まことに要組ではあるが、その存在の意義は誠に重大である。日本産業の基礎事業として常に開拓者的精神を以て科学技術への途を歩むことこそ現代文化に貢献する唯一の途であろう。

以上、

夏季親麻雀大会

37-6-24

番号	所属	氏名	1 回 戦	2 回 戦	合 計	3 回 戦	累 計	順 位
1	富士南苑	加 藤	⊖ 6,900	⊕ 16,500	⊖ 9,600	⊖ 1,600	⊕ 8,000	11
2	東邦盛泉	伊 藤	⊕ 100	⊖ 2,500	⊖ 2,400	⊖ 4,700	⊖ 7,000	
4	富士南苑	前 田	⊕ 6,100	⊖ 2,100	⊕ 4,000	⊖ 5,600	⊖ 1,600	15
6	村木盛泉	中 島	⊕ 13,900	⊖ 5,400	⊕ 8,500	⊖ 9,700	⊖ 1,200	14
8	中央盛泉	前 田	⊖ 10,500	⊖ 23,400	⊖ 33,900	⊖ 19,500	⊖ 24,400	
9	協 会	加 藤	⊕ 13,000	⊖ 4,100	⊕ 8,900	⊖ 100	⊕ 9,000	10
10	東邦盛泉	伊 藤	⊖ 12,500	⊖ 11,800	⊖ 24,300	⊖ 21,400	⊖ 2,900	
12	東海盛泉	村 瀬	⊕ 11,400	⊖ 7,300	⊖ 4,100	⊖ 12,800	⊖ 8,700	
13	大栄盛泉	重 松	⊖ 16,800	⊕ 1,000	⊖ 15,800	⊖ 16,000	⊖ 31,800	
14	中央南苑	松 井	⊖ 12,700	⊕ 22,400	⊕ 9,700	⊖ 24,000	⊖ 14,300	
15	富士南苑	水 野	⊕ 2,700	⊕ 2,800	⊕ 5,500	⊖ 1,200	⊕ 4,300	13
18	富士南苑	松 井	⊕ 40,700	⊕ 1,400	⊕ 42,100	⊖ 28,100	⊕ 14,000	1
19	中央南苑	佐 藤	⊖ 13,400	⊖ 18,300	⊖ 31,700	⊖ 4,100	⊖ 35,800	
21	東京ボート	村 瀬	⊖ 10,700	⊕ 6,600	⊖ 4,100	⊖ 27,200	⊖ 31,300	
22	大栄盛泉	内 藤	⊖ 7,500	⊖ 6,500	⊖ 14,000	⊖ 19,600	⊕ 5,600	12
23	中野ウエル	祖父江	⊖ 11,800	⊖ 600	⊖ 12,400	⊖ 8,900	⊖ 21,300	
25	中央南苑	田 村	⊕ 1,700	⊖ 5,100	⊖ 3,400	⊖ 6,400	⊖ 9,800	
26	菅 盛盛	高 橋	⊖ 30,900	⊖ 12,800	⊖ 43,700	⊖ 4,700	⊖ 39,000	
27	村木盛泉	寺 田	⊖ 8,500	⊕ 17,400	⊕ 8,900	⊖ 11,300	⊖ 2,400	
28	大栄盛泉	大 友	⊕ 18,500	⊕ 2,900	⊕ 21,400	⊖ 400	⊕ 21,000	6
29	日本盛泉	小 野	⊕ 21,600	⊕ 20,000	⊕ 41,600	⊖ 11,100	⊕ 30,500	3

番号	所属	氏名	1 回 戦	2 回 戦	合 計	3 回 戦	累 計	順 位
30	川崎ホーリング	谷 口	⊖ 18,900	⊖ 300	⊖ 19,200	⊕ 7,000	⊖ 12,200	
32	村木整泉	武 内	⊖ 5,700	⊕ 5,300	⊖ 400	⊕ 19,600	⊕ 19,200	7
33	東京ホーリング	藤 原	⊖ 3,900	⊖ 15,300	⊖ 19,200	⊖ 12,400	⊖ 31,600	
34	東京ホーリング	河 庭	⊖ 16,100	⊕ 7,700	⊖ 8,400	⊖ 17,600	⊕ 26,000	
35	富士興発	伊 藤	⊖ 200	⊖ 12,000	⊖ 12,200	⊕ 6,900	⊕ 5,300	
36	中央興発	坂 藤	⊕ 7,700	⊕ 12,200	⊕ 19,900	⊕ 27,300	⊕ 47,200	2
37	富士興発	百 寿	⊕ 4,800	⊖ 12,900	⊖ 8,100	⊕ 38,300	⊕ 30,200	
38	村木整泉	若 杉	⊕ 14,600	⊕ 16,800	⊕ 31,400	⊖ 16,600	⊕ 14,800	9
39	鷺 基陸	加 藤	⊕ 33,300	⊖ 24,300	⊕ 9,000	⊕ 20,900	⊕ 29,900	5
40	日本興発	左 野	⊖ 800	⊕ 19,600	⊕ 18,800	⊖ 1,700	⊕ 17,100	8

画いて酔った旅な内に時を通し / 8 時後会食を共にした。

文 芸 ら ん

天塩路に春の雪降る光かな

悠 光

眠る猫の背にも蝶来る午後陽射し

富 雄

花の種蒔き終え仰ぐ空青し

かず子

春泥にためらいもなく炭賣女

ゆきえ

牡丹の芽洗濯物のみな淑手に

多 峰

花のバス留守の家並見て超える

悠 三

存分に遊し取と子等戻る

朱 実

ひとやかに夕は霞の立ちこめて

並水廻行く人の美し、

楠 子

船近く寄りつ函れつ海船の

群るはるか街見えと来ぬ

清 邦

腹の吾児目立つを少し恥しく

思い乍らも今日衣更えする

みどり

6 月 分 業 績 表

(単位千円)

月 日	発 注 先	工 事 名	受 注 者	金 額
6-1	国鉄岐阜工務局	静岡地区改良地盤調査 その三	中央興産	870
6-2	県土木課管理課	土質調査工事	"	4,000
"	県衣浦港務所	伊勢湾高潮対策事業の 内(大浜港)	川崎ボーリング	225
"	"	" (衣浦港)	"	340
6-5	豊橋土木出張所	防潮堤内地区築孔調査 工事	土質調査	107
6-6	名古屋市交通局高速鉄 道建設部	高速鉄道土質調査工 事その一	中京整染	1,250
6-7	中部電力株式会社	中谷発電所地区地質調 査工事	総 金 組	700
6-8	県豊田土木出張所	地区対策地質調査工事	土質調査	130
"	住毛金融公庫名古屋支 所	住毛金融公庫名古屋事 務所建設調査	亦用地質	120
6-9	県衣浦港務所	コソ年度港湾改修工事 衣浦半田地区	"	430
6-13	県水道部	知多調整池土捨場	三石K.K	610
"	名古屋市土木局	城郭下水処理場移設地 質調査	土質調査	590
6-15	県内陸用地対策部用地 課	内陸造成地土質調査工 事	川崎ボーリング	1,680
"	県邦瓦斯株式会社	選出出張所敷地区地質調 査工事	東海整染	116
6-16	東海電気通信局	天田電話局地盤調査工 事	大栄基礎	700

(単位千円)

月 日	発 注 先	工 事 名	受 注 者	金 額
6-16	東海電気通信局	遠徳電話局地質調査工 事	応用地質	675
6-16	"	奥電話局 "	近畿ボーリング	420
6-19	泉半田土木出張所	街路事業調査工事(名知)	日本地質	690
6-21	名港管理組合	J号地若壁地質調査工事	三祐KK	450
6-22	日本道路公団高速道路 名古屋建設局	名神高速変路小牧地区 調査工事(その一)	菅 基 礎	860
"	"	" (その三)	土質調査	760
6-27	京豊橋製地産発事務所	トンネル調査工事(あ)	信士地質	980
6-28	" 水道部	知多調整池地質調査工 事	三祐KK	1300
6-29	中部地産紀勢国道工事 事務所	大空地区試錐調査工事	土質調査	2,540

7 月 分 業 績 表

(単位千円)

月 日	受 注 先	工 事 名	受 注 者	金 額
7-3	豊橋土木出張所	巻野基本調査の内地質調査工事	日本開発	1,670
7-11	半田土木出張所	伊勢湾台風高瀬対策工事測量及試験地質調査	土質調査	330
16	県土木部監理課	臨海用地対策事業土質調査工事	三祐土木	3,580
18	豊橋農地開発事務所	陸田地質調査工事(その一)	青葉工業	380
18	豊林省名古屋農地局	濃美第一地区灌漑構築工事	大栄基礎	1,350
19	名古屋土木出張所	伊勢湾高瀬対策事業の内地質調査工事	日本開発	520
20	市水道局下水道工事課	山崎汚泥処理施設地質調査工事	土質調査	1,020
21	国鉄名古屋幹線工事局	名古屋地区横堀河地質調査	興亜開発	228
23	運輸省岡崎市港務所	岡崎市港高瀬対策地質調査工事	土質調査	735
"	衣ヶ浦港務所	伊勢湾高瀬対策地質調査工事	三祐KK	220
"	名古屋郵政局	吹上住吉アパートデストボーリング工事	興亜開発	120
"	"	豊岡右田アパートボーリング工事	応用地質	200
25	中部電力株式会社	中呂地点支水路地質調査工事	熊金組	770
28	名古屋市土木局	築地橋改築地質調査工事	応用地質	594
30	紀勢国道工事事務所	大台地区ボーリング調査	片岡開発	2,000

円)

額
570
30
80
40
50
20
20
8
5
0
0
0
0
4
0

月 日	受 注 者	工 事 名	受 注 者	金 額
31	水田川下流工事及防	御砂樋管地質調査工事	施用地質	420
"	東海電気通信局	下一色報誌局地質調査工事	富士開発	130
		計		14,267